

詩とことば

阿部 公彦

鉄道愛好家でなくとも、目の前を通り過ぎる電車のなめらかな動きに思わず見とれることはあるだろう。動くものは、ただ動いているというだけで美しい。

ことばにもそうした魅力がある。ただ語られている、つながり、広がっているというだけでこちらを引き込み幻惑してしまふ。詩人はそういう秘密をよく知っているから、「まさかそんな快楽があったかー」と驚くようなことばの使い方をする。

今季の作品では浜江順子『密室の感屋へ』（思潮社）。せわしない展開の速さに目がまわりそうになる、その快楽。「歪められた鼻、歪められた目、歪められた耳、もしかしたら、その歪曲からなにやら不思議なひとつの花が咲くように、もうひとつの顔になるのか

もしれない」「ふたつの顔」。行分けなしの散文詩ならではの運動感覚で、コマからコマへの微妙な移行が映像を生み出すように、ズレや差異をどんどん利用する。「ズレとズレが木々の

動いているだけで美しい

ような神経をちらちらスパークさせ、次第に死の森を形成する」(「不信の森」)

北原千代『真珠川』(同)はまるで和歌のようにおらかな旋律が魅力だ。病の中でも不思議と息苦しくはならず、むしろ呼吸が通るような心地を体験させてくれる。「ひろげてみせる内臓は 花びらがびっしり 咳こむたび / 鱧えたももいろの体液が穴々からこぼれますが

先生はき／びんのよい胡桃のよじらわらって
しんぼりはいりません／
と仰います」(「櫻池」)
福岡健二『会いたい人』

(同)はいかにも運動的なぞぶりは見せないが、要所できゅっとしほるように、すすっと足早になるのが持ち味。「装置に人のしずくも動かされて
いる／雨に打たれるアン
トのなかの／暗くてわか
りにくい出来事」「糊の
入ったバケツと／ピラの
の、いつもの、出口のな
い夢に／目をつもって音
楽の耳だけですわって
いた」(「朝をひらく」)。

四元康祐を思わせるアクロパティックな本歌取りで読ませるのは米山浩平『四千の通行人』(書肆午線)。時をこえ旋律のレールをきわどく乗り換える手際を支えているのは、遠い声を聴きとる耳の力だ。

(東京大准教授)